

広報課 活動実績(令和5年度)

当課は、JHという組織及びJHが行っている研究が、研究者や企業など広く認知されるように広報活動を行っている。

1. ホームページの充実

JHドメインにある各種ページの更新、新規研究概要の掲載、既存研究課題の英語ページ等の掲載



文字サイズ 中 大 表示色 A A English 検索

トップページ

招徠について

事業の概要

広報

トップ > 広報 > 6NCリトリート > 6NCリトリート2023 > 開催報告

開催報告

6NCリトリートポスターセッション「6NCが拓く新たなサイエンスの地平」を令和5年4月22日(土)に開催しました。

今回、「第31回日本医学会総会2023東京」において、プログラム内で6NCリトリートを開催することになり、若手研究者のポスターセッションを中心とし、6NCの研究者・医療者の交流を図りました。また、優秀なポスター課題については、理事員及びH本部長員の表彰を行い、表彰状及び盾を授けました。

今回の6NCリトリートは初めての開催でしたが、研究・医療関係者など約400名の皆様にご参加いただきました。

6NCリトリート2023

▶ 開催概要

▶ 開催報告

抗腫瘍薬による胎盤形成・機能障害メカニズムの解析 基盤の作出

研究概要

近年、がん治療成績は目覚ましい向上をみせています。それに伴い、多くのがんではいかに治療を生き抜くか、という時代から、いかに治療中、治療後の患者さんの生活を向上させるか、ということを議論する時代となってきています。特に、Adolescent and Young Adult (AYA) 世代のがん患者さんは、治療中、治療後に様々なライフイベントに直面するため、社会として個々に合わせたサポートを今後ますます充実させていく必要があります。AYA世代のライフイベントの中で、妊娠・出産は最も大きなものの一つですが、近年の晩婚化、母体年齢の上昇により、妊娠中に発見されるがんの頻度は上昇傾向であり、課題となっています。

妊娠中のがん治療は、お母さんに対して最善のがん治療をいつ、かつ赤ちゃんへの不利益を最小限にする、という原則の下行われます。抗がん剤を用いた治療は、妊娠中のがん治療の中心的な役割を担います。抗がん剤は、薬の種類によって異なるものの、赤ちゃんが臓器を作っている期間(妊娠初期)を過ぎたら使用可能であり、リスクを大きく上回るベネフィットが報告されています。

胎盤は、妊娠中に赤ちゃんを育てる最も重要な臓器です。赤ちゃんを育てる他にも、お母さんに授けられた薬をブロックするなどの働きもしています。これまで、妊娠中の抗がん剤の影響に関しては、多くの場合赤ちゃんに対する直接的な影響を元に評価されてきました。一方で、赤ちゃんを育てる役割を担う胎盤に関しては、抗がん剤が何らかの影響を与えるのか、あるいは与えないのかに関して、はつきりしたことはほとんどわかっていません。

そこで、本研究では、抗がん剤が胎盤にどのように影響するかを、胎盤を形成する細胞(栄養膜細胞)モデルを用いて検討するとともに、妊娠中にがん治療を経験した妊婦さんの情報や胎盤を収集し、その後の解析の基盤を確立します。

研究のイメージ図

抗腫瘍薬による胎盤形成・機能障害メカニズムの解析基盤の作出

胎盤細胞モデルを使用した解析

妊娠中に抗がん剤治療を受けた妊婦さんの臨床情報・胎盤組織の収集・解析



抗腫瘍薬が胎盤形成/機能へ及ぼす影響を評価するための基盤を作成

研究論文刊行成果 (2021-2023)

2023年

- Abe SK, Ihira H, Minami T, Imatoh T, Inoue Y, Tsutsumimoto K, Kobayashi N, Kashima R, Konishi M, Doi T, Teramoto M, Kabe I, Lee S, Watanabe M, Dohi S, Sakai Y, Nishita Y, Morisaki N, Tachimori H, Kokubo Y, Yamaji T, Shimada H, Mizoue T, Sawada N, Tsugane S, Iwasaki M, Inoue M. Prevalence of family history of cancer in the NC-CCAPH consortium of Japan. *Sci Rep* 2023;13:3128.
- Furutani M, Suganuma M, Akiyama S, Mitsumori R, Takemura M, Matsui Y, Satake S, Nakano Y, Niida S, Ozaki K, Hosoyama T, Shigemizu D. RNA-Sequencing Analysis Identification of Potential Biomarkers for Diagnosis of Sarcopenia. *J Gerontol A Biol Sci Med Sci* 2023;78:1991-8.
- Harada T, Tsuji T, Tanaka M, Konishi N, Yanagisawa T, Koishihara Y, Ueno J, Mizutani T, Nishiyama N, Soeda R, Hijikata N, Ishikawa A, Hayashi R. Priority of the basic and instrumental activities of daily living in older patients with cancer prescribed rehabilitation: a cross-sectional survey. *Support Care Cancer* 2023;31:503.
- Harada T, Tsuji T, Ueno J, Hijikata N, Ishikawa A, Kotani D, Kojima T, Fujita T. Association of sarcopenia with relative dose intensity of neoadjuvant chemotherapy in older patients with locally advanced esophageal cancer: A retrospective cohort study. *J Geriatr Oncol* 2023;14:1015-80.
- Harada T, Tsuji T, Yanagisawa T, Ueno J, Hijikata N, Ishikawa A, Hiroshige K, Kotani D, Kojima T, Fujita T. Skeletal muscle mass recovery after oesophagectomy and neoadjuvant chemotherapy in oesophageal cancer: retrospective cohort study. *BMJ Support Palliat Care* 2023 May 2;spcare-2023-004245. doi: 10.1136/spcare-2023-004245. Online ahead of print.
- Hasegawa N, Yasuda Y, Yasui-Furukori N, Yamada H, Hori H, Ichihashi K, Takaesu Y, Iida H, Muraoka H, Kodaka F, Iga JI, Hashimoto N, Ogasawara K, Ohi K, Fukumoto K, Numata S, Tsuboi T, Usami M, Hishimoto A, Furihata R, Kishimoto T, Nakamura T, Katsumoto E, Ochi S, Nagasawa T, Atake K, Kubota C, Komatsu H, Yamagata H, Ide K, Takeshima M, Kido M, Kikuchi S, Okada T, Matsumoto J, Miura K, Shimazu T, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R. Effect of education regarding treatment guidelines for schizophrenia and depression on the treatment behavior of psychiatrists: A multicenter study. *Psychiatry Clin Neurosci* 2023;77:559-68.
- Hirayama T, Ikezawa S, Okubo R, Mizuta T, Iwata S, Suzuki T. Mental health care use and related factors in adolescents and young adults with cancer. *Support Care Cancer* 2023;31:247.
- Honyashiki M, Decoster J, Lo WTL, Shimazu T, Usuda K, Nishi D. Mental Health Reform Processes and Service Delivery Shift From the Hospital to the Community in Belgium and Hong Kong. *Health Serv Insights* 2023;16:11786329231211777.
- Inoue Y, Li Y, Yamamoto S, Fukunaga A, Ishiwari H, Ishii M, Miyo K, Ujii M, Sugiura W, Ohmagari N, Mizoue T. The association between antipyretic analgesics use and SARS-CoV-2 antibody titers following the second dose of the BNT162b2 mRNA vaccine: An observational study. *Vaccine* 2023;41:7317-21.

広報課 活動実績(令和5年度)

2. プレスリリースの配信

令和5年度においても、JH支援の研究課題によりプレスリリースを配信

低出生体重による出生は心血管疾患や生活習慣病リスクを増加
～日本初！出生体重と成人後期の生活習慣病の関連が明らかに～（令和5年11月21日）



PRESS RELEASE

報道関係者各位

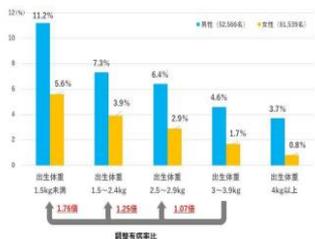
2023年11月21日
国立成育医療研究センター
国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 (JH)

低出生体重による出生は心血管疾患や生活習慣病リスクを増加
～日本初！出生体重と成人後期の生活習慣病の関連が明らかに～

国立成育医療研究センター（東京都世田谷区、理事長：五十嵐 隆）の社会医学研究部の森崎 菜穂、内分秘・代謝科の吉井 啓介らの研究グループは、国立がん研究センターなどと共同で行っている次世代多目的コホート研究（JPHC-NEXT）にて、出生体重と成人後期（40～74歳）の心血管疾患（心筋梗塞、脳梗塞など）リスク、および各種生活習慣病（高血圧・糖尿病・高脂血症・痛風）との関連を調べた研究を行いました。

その結果、成人後期の心血管疾患の罹患率は、出生体重が3kg台の方と比べて、低出生体重児（出生体重が2.5kg未満）の方は1.25倍、極低出生体重児（出生体重が1.5kg未満）の方は1.76倍と高いことが分かりました。（グラフ1）

【グラフ1：心血管疾患（心筋梗塞、脳梗塞など）を経験したことがある割合】

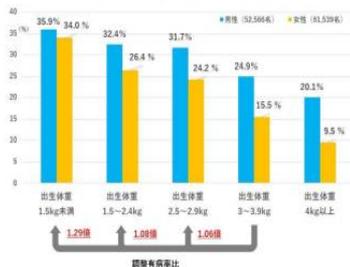


※ 次世代多目的コホート研究（JPHC-NEXT）は「多目的コホート」に基づくがん予防やがん早期発見の検診・検診に代わるがんの早期発見に関する研究（国立がん研究センター）、日本人の生活習慣・生活環境が、がんなどの生活習慣病とどのように関わっているのかを明らかにすることを目的とした研究です。2011年に始まり7歳16市町村の常陸国民112万人（研究開始時40万7千4百人）を対象として行われています。

※ 出生体重の区分：4000g以上＝高出生体重児、3500～4000g未満＝正出生体重児、2500g未満＝低出生体重児、1500g未満＝極低出生体重児。

また、心血管疾患のリスクとして知られている高血圧、糖尿病も出生体重が低いほど罹患率が高いことが分かりました。（グラフ2、3）この研究で、出生体重と成人後期の生活習慣病の関連が日本で初めて明らかになりました。本研究結果は、疫学専門誌「Journal of Epidemiology」で発表されました（2023年11月18日 Web 先行公開）。

【グラフ2：高血圧を経験したことがある割合】



【グラフ3：糖尿病を経験したことがある割合】



【プレスリリースのポイント】

- 出生体重が小さい方ほど、成人後期に心血管疾患のリスクが高いことが分かりました。
- 出生体重が小さい方ほど、成人後期に高血圧、糖尿病の生活習慣病になりやすいことも分かりました。
- 出生体重と成人後期の生活習慣病の関連を、日本で初めて明らかにした研究成果です。
- 日本では10人に1人が出生体重2.5kg未満、100人に1人が出生体重1.5kg未満で生まれています。今後、低出生体重による出生が増えないための予防の取り組みや、低出生体重児として生まれた方々の成人後の健康増進のために、本研究の知見が正しく周知され、予防医学の精度の向上に役立つことが期待されます。

【背景・目的】

- 令和6年度（2024年度）から第5次国民健康づくり（健康日本21（第三次））がスタートします。健康日本21（第二次）の評価では、生活習慣病の一次予防に関連する指標の悪化が指摘されました。
- 健康日本21（第三次）では、脳血管疾患・心疾患の年齢調整死亡率の減少、高血圧の改善、糖尿病有病者の増加の抑制も目標に含まれています。
- 低出生体重が、心血管疾患や生活習慣病（高血圧・糖尿病など）のリスク因子になることは、ヨーロッパを中心とした疫学研究で明らかになっていましたが、日本人の大規模集団では調査されていませんでした。
- 日本では、1980年から2000年にかけて低出生体重児の割合が約2倍に増加し、その後も高止まりしています。1980年に出生した世代は2020年に40歳になり、生活習慣病を発症しやすい成人後期に差し掛かります。そのため、日本人においても出生体重が小さく生まれた方は、心血管疾患や生活習慣病の発症リスクが高いかを調べる研究が求められていました。

【研究概要】

研究対象：2011～2016年に、次世代多目的コホート研究（JPHC-NEXT）対象地域（秋田県、岩手県、茨城県、長野県、高知県、愛媛県、長崎県）にお住まいで、本研究に同意いただいた40～74歳の約11万人の方々

研究方法：①自分の出生体重と、心血管疾患および、各種生活習慣病（高血圧・糖尿病・高脂血症・痛風）にかかったことがあるかどうかをアンケートで回答。
②出生体重を、1,500g未満、1,500～2,499g、2,500～2,999g、3,000～3,999g、4,000g以上の5つのグループに分け、それぞれのグループごとに心血管疾患、高血圧、糖尿病、高脂血症、痛風の発生率を算出。
③自己申告による自身の出生体重が3,000～3,999gを基準として、その他の出生体重（1,500g未満、1,500～2,499g、2,500～2,999g、4,000g以上）における、心血管疾患および、各種生活習慣病の有無との関連を検討。その際、地域、出生年、教育歴、高血圧または糖尿病の家族歴、受動喫煙年数、身長、年上の兄弟の有無、初回妊娠時年齢、喫煙習慣、20歳時の体格を統計学的に調整し、これらの影響をできるだけ取り除いた調整有病率比（adjusted prevalence ratio）を算出。

【今後の展望・発表者のコメント】

本研究では、ヨーロッパを中心とした研究ですでに指摘されていた出生体重と生活習慣病との関連を、日本人で初めて調べました。その結果、低出生体重児や極低出生体重児として出生した方は、成人後期に心血管疾患を発症しやすく、また高血圧・糖尿病の生活習慣病を発症しやすいことが、日本人においても明らかになりました。今後は、幼少期からの生活習慣への介入など、低出生体重児として生まれた方々の成人期の健康を最適化するための研究が必要です。低出生体重による出生を予防するために、妊娠前・妊娠中の母親の健康と適切なケアも重要です。将来の妊娠のための健康管理に関する情報提供を男女問わず推進するなど、プレコンセプションケアに関する体制整備をさらに進めることも求められています。

※ 一次予防：予防医学における分類。食生活や適度な運動など、生活習慣の改善で病気にかからないようにすること。
※ 二次予防：人間ドックなどの定期検診。三次予防：リハビリなどで病気の再発を予防し社会復帰へつなげること。

